## 50年後の乳幼児健康診査を想う

沖縄県小児保健協会 副会長　當間 隆也
（Kukuruきっずクリニック 小児科医師）

50年後、小児保健協会の集団健診は存在しているだろうか。社会は個別化の方向へ進んでいる。一人一台電話を持つ時代が来るなんて誰が予想しただろう。核家族化が進み、物は潤沢になり、情報は氾濫し、個々の選択肢が増えている。医療も個々に細やかに対応する個別化の時代に入っている。少子化でこどもはますます貴重な宝となるので、乳幼児健診でもより繊細な対応が求められるであろう。AIが適切な回答を導きだし相手をする時代になるのだろうか？　そんな無機質的な乳幼児健診になることを私は何よりも懸念している。

テクノロジーが我々の暮らしの基盤となり必要不可欠になっていく未来において、乳幼児健診には何が求められるのであろうか？　私は「心を育てる」がキーワードだと思っている。どんなに生活が便利になっても、医療が進歩しても、それだけでは人は幸せにはなれない。心と心が繋がる関係があり、多様な価値観を認め合い、お互いを尊重しあう社会環境であってほしいと望む。

乳幼児健診の場で親子同士の交流があり、親が自信を持って子育てが出来、結果として心豊かなこどもたちが育ち、より良いやさしい社会となっている。そんな50年後を私は期待している。

## 小児保健協会創立50周年に寄せて

沖縄県小児保健協会 副会長　上里 とも子
（保健師）

「健全なる社会の発展は、健全なる小児の育成にならなければならない」との趣旨のもと沖縄小児保健協会は創設され、この度50周年を迎えました。

私は令和４年度から保健師として、また今年度は副会長として当協会に勤め、今回様々な記念事業をとおして協会創立に奮闘された先輩諸氏の熱い情熱に触れ、協会の歩みや多職種の皆様から様々なご意見を伺う機会を得ました。

現在は創立当時の困難さとは異なるものの、少子高齢化、経済の問題、核家族化の進展や地域の連帯意識の希薄化など子育て環境は厳しさを増すばかりです。

国ではこども基本法を制定し、こども家庭庁を創設、こども家庭センターの設置など、こどもの最善の利益を優先し子育て支援の様々な施策を展開しています。本県でも妊娠期からのつながる仕組みを構築し、誰一人取り残すことのないよう行政をはじめ関係機関が連携し支援に取り組んでいるところです。

そのような中、当協会にはこれまで以上に事業の充実や、「健やかな一生」の端緒としてより質の高いサービスを追求し、保健・医療・福祉・教育の幅広い視点での展開が期待されるでしょう。

今こそ創立の趣旨に立ち返り、こどもを真ん中にした社会を築けるよう会長を筆頭に協会役員の一人として、関係諸氏とともに模索していきたいと思います。

## 小児保健協会創立50周年に寄せて

沖縄県小児保健協会 理事 新垣 初美
（沖縄県保育士・保育教諭会 保育士）

沖縄県のこどもたちの健康を守るため設立された沖縄県小児保健協会が創設50周年を迎えました。

令和４年度沖縄県保育士・保育教諭会会長就任とともに本会の理事として参加させていただくこととなりましたが、小児保健協会についてまったく知識がなく戸惑いながらの参加となりました。理事会への参加を通して小児保健協会が、こどもの健康に関する調査や研究、医師・看護師・保健師等それぞれの専門性を活かしながらの共有連携、他県とは違い県と協会が連携して乳児検診を行う事により効率的で高品質な健診が提供されている事、全県的に行う事により多くのデータの蓄積や分析により小児の健康を守り、ひいては、大人になってからの健康に繋がる豊かな人生を送る為の大きな支えとなっている事を知りました。

また、日々の業務終了後に理事会や各専門部を通して研鑽をつみながら沖縄県のこどもたちの未来の為に尽力されている事も知りました。これらの小児保健協会の活動を多くの方に知ってもらい、素晴らしい活動を今後も継続してほしいと願います。

最後に沖縄県小児保健協会の今後ますますのご発展と皆様のご活躍をお祈り申しあげます。

## 乳幼児健診とアレルギー疾患のこれまでとこれから

沖縄県小児保健協会 理事 新垣 洋平
（那覇市立病院 小児科医師）

私は沖縄小児保健協会設立後に生まれ、乳幼児健診や予防接種事業の恩恵を受けて成長した世代になりますので、今回、寄稿させていただけることを大変光栄に思います。

私は約10年前から乳幼児健診委員会に委員として参加しています。乳幼児健診委員会では、乳幼児特有の疾患の早期発見のみならず、様々な疾患の予防対策、育児指導についても検討、議論がされています。特に私は沖縄県アレルギー疾患等医療連絡協議会にも参加しており、小児保健の分野においてアレルギー疾患の予防はとても重要であると考えています。小児アレルギー疾患の有症率は、気管支喘息は減少傾向ですが、食物アレルギーやアレルギー性鼻炎は未だに増加傾向にあります。離乳食の指導ひとつをとっても、ここ10年で大きく変化しました。以前であれば、食物アレルギーの原因となる食品は、摂取時期を遅らせるよう指導がされていました。しかし、最近は食物アレルギー予防の観点から、これらの食品も食事の形態に注意しつつ、時期を遅らせずに開始するよう指導されるようになりました。

アレルギー疾患のみならず、今後も様々な分野で新しい知見が発見され、小児保健･乳幼児健診の“常識”は変化していくと考えられます。未来あるこどもたちのために、今後も本協会に貢献できるよう研鑽を積んでいく所存です。

## 小児保健協会と関りを持って２年

沖縄県小児保健協会 理事 伊波 清秀
（事務局長）

私は沖縄県小児保健協会と関りを持って２年になる。大きく２つのことを感じている。

１つ目は、日本小児保健協会のホームページを通して各都道府県の小児保健協会を検索してみた。「公益社団法人」という組織を持ち、自前の建物まで持つ協会は他にはない。唯一無二の団体であること。

２つ目に、沖縄県小児保健協会は市町村が行う乳幼児健診をサポートしているが、他県の小児保健協会でこのような活動を行っているところはない。

そもそも1972（昭和47）年の沖縄の日本復帰に際し、他県では医療機関に委託実施している乳児の一般健診が、医療施設、保健医療従事者の少ない沖縄県では難しく、離島へき地と言われるところでは更に厳しかった。そのために県から沖縄県小児保健協会へ健診業務を委託し、離島を含めた沖縄県全域での多職種による精度の高い巡回集団健診を実施している。親子が医療機関に出向けないならば、こちらから地域に出向いて行こう。まさに弱みを強みに変える逆転の発想となっている。

手前味噌になりますが、沖縄県小児保健協会はこんなすごい協会です。これからも100年先を目指して頑張っていきましょう。

## 沖縄県小児保健協会と私

沖縄県小児保健協会 理事 上原 真理子
（うえはらこどもクリニック 小児科医師）

初めての沖縄県小児保健協会との接点は、元会長の小渡有明先生から1982（昭和57）年に乳幼児健診の依頼があったことに始まる。1988（昭和63）年の小児保健学会にて「3歳児検尿の意義と課題」を発表し、賞を頂いた事も嬉しい思い出である。1998（平成10）年には全県で麻疹流行が起こり、1999（平成11）年には中部病院からの呼びかけで病院の小児科麻疹病棟を視察させて頂いた。そこには気管内挿管された小児ベッドが何台も並び、小児科医は何日もの泊まり込みで疲弊した姿があった。私達は大きな衝撃を受け、こどもを死なせない、こどもを救う医師を斃（たお）れさせない為に何をすべきか真剣に考え行動する日々。

2001（平成13）年春には沖縄県小児保健協会が音頭を取り、「はしかゼロプロジェクト」が始動する。パネルディスカッションやセミナー、パレットくもじ前での広報活動等あらゆる方法での活動がなされ、夜の会議には多職種がボランティアで集まり、19時から22時近くまで論議を深めて対策・システム作りをしていった。後にアジア西太平洋地域での「麻疹ゼロ」達成に繋がる活動である。沖縄における八重山マラリアや宮古フィラリア防圧に比肩する現代の公衆衛生活動であったと考えている。この活動に関わらせて頂いた一員として、50周年の節目に当たり大変な光栄なことであったと改めて感じている。今後の協会の更なる発展を祈ります。

## 食環境の変化に応じた「栄養の指導」

沖縄県小児保健協会 理事 笠原 寛子
（沖縄県栄養士会 管理栄養士）

沖縄県栄養士会は1965（昭和40）年に発足ですが、既に1953（昭和28）年からは学校給食が開始され、更に1955（昭和30）年に母子栄養指導が本格化されたことで、各地域において離乳・幼児食相談や乳幼児栄養学術講習会の開催、保育所給食研究会、調理実習等を通して、こども達の健やかな成長発育を目指し栄養の確保と改善を行ってきました。また、各市町村において乳幼児健診の際に使用する栄養指導の媒体を作成し、関係者からの意見を取り入れ改訂を続け、現在も必要な方に提供しています。

しかし、近年のこども達の食環境は、栄養素摂取の偏り、朝食の欠食、小児期における肥満の増加、思春期におけるやせの増加など、長寿県復活の鍵を握るこども達の生涯にわたる健康への影響が懸念されます。また。共稼ぎの多い沖縄では、調理済食品やインスタント食品、冷凍食品等の加工技術や流通によって食をとりまく環境は大きく変化しており、乳幼児期からの家庭での食事のあり方にも変化がみられます。そのような環境のなかでも、「誰かと一緒に食べると美味しい」を知ってもらえるような食育事業を推進していくことが、未来のこどもたちの輝きにつながると思っております。

これからもライフステージに応じた「栄養の指導」として、食育事業の推進と乳幼児集団検診での保護者、こども達への積極的なアプローチをしていきます。

## 社会でこどもを育てるという意味

沖縄県小児保健協会 理事 勝連 啓介
（ピアラルうらそえ 小児科医師）

30年ほど前の研修医時代に「社会で子どもを育てるという意味がわかるか」と問いかけてくれたのが、宮城雅也会長でした。親子の関係性構築と子育てしやすいまちづくりに向かう沖縄県小児保健協会の歩みそのものが、いつも私の仕事に新しい発想を与えてくれます。

2021（令和3）年に浦添市障がい福祉関連複合施設ピアラルうらそえを立ち上げました。母子保健と児童福祉の切れ目のない機能連携が理念です。まず、健診やこども家庭センターからつながるのは、「そだちのひろば うぐいす」。障がいが明確になる前の段階から通える親子教室です。その先は、療育と親支援を専門的に行う「児童発達支援センターたんぽぽ」につなぎます。そして、親が必要と考えるタイミングで受診できる「発達相談クリニックそえ～る」が準備されています。障がいを持つ方々が暮らしやすい地域となるよう自立支援協議会を運営する「基幹相談支援センターてだこの森」も入って、ライフステージに応じた発達支援体制整備を目指しています。

これからの50年、きっと多職種連携、多機関協働がさらに求められていくことでしょう。子どもの権利と社会的養育の保障にも、沖縄県小児保健協会はチームで挑んでいくでしょうから、そこに関わることができるとしたら、それはきっと私たちひとりひとりの専門領域における専門性の追求にも、つながるものと思っています。

## 沖縄のこどもたちの未来のために

沖縄県小児保健協会 理事 兼次 拓也
（琉球大学大学院医学研究科育成医学（小児科）講座 小児科医師）

琉球大学病院の発足が1969（昭和44）年であり、沖縄県小児保健協会と時を同じくして共に、沖縄県の小児医療を共に支えてきたことを非常に感慨深く思うと共に、これまで当協会に尽力されてこられた沢山の先輩達に謝意を表したいと思います。50年前と比較して、社会の変化と共に子どもを取り巻く生活、医療環境は大きく変化してきました。一人っ子、共働き、核家族化、児童放課後デイサービス、複数の塾通い、睡眠時間の短縮化、小児生活習慣病、虐待、SNS等。同時に、医療の進歩に伴い様々な難病が治療できるようになり、公的助成制度が充実され、患児の生命予後は改善してきました。

しかしながら慢性疾患児童数、在宅医療児童数の増加、成人科への移行問題など、さまざまな課題が存在します。さらには、近年の災害に伴う医療問題など、こどもたちを取り巻く保健、医療課題はこれからも尽きることなく形を変えて、我々に迫ってくるものと思います。ですが、その全てにおいて、こどもたちが健やかで朗らかで過ごせる事が目標である事に違いはなく、これからも沖縄のこども達のために微力ではありますが、共に考え、汗を流す事ができればと思います。

## 小児保健協会50周年記念に寄せて

沖縄県小児保健協会 理事 亀川 偉作
（亀川法律事務所 弁護士）

創立50周年と一言でいうのはたやすいですが、半世紀ですよね。当会は子どもの心身の健全育成に寄与することを目的に創立されましたが、この半世紀の間、小児保健事業にご尽力されてきた当会の先生方、スタッフの皆様に心より敬意を表します。

昨今は、子どもの貧困や児童虐待等が社会的にも問題視されるようになっておりますが、子どもの貧困や児童に対する虐待等は、単純に親の経済的困窮等にのみ原因があるということではなく、親の精神的・肉体的な疾患等が広く関係しており、解決困難な面が多々あります。そのような中、乳幼児健診の際に母子のおかれた悪環境や乳幼児に対する虐待等が発覚するというケースもあることから、私は、法律専門家として、乳幼児健診事業は、各家庭のおかれた問題をいち早く発見する可能性を持った事業であると感じております。一早く子らの置かれた悪環境を改善していくという観点からも、各市町村、自治体には、当会における同事業の可能性を理解して頂き、さらに連携を深め、乳幼児事業のみならず当会の各事業の推進にご賛同頂ければ、益々、地域の子どもの心身の健全育成という当会の目的が果たせていけるのではないかと思料いたします。私も微力ながら法的な観点からお手伝いが出来たら幸いです。当会の益々のご発展を祈念申し上げます。

## 小児保健協会から教わったこと

沖縄県小児保健協会 理事　小濱 守安
（沖縄南部療育医療センター 小児科医師）

小児保健協会との出会いは乳児健診です。1982（昭和57）年5月に中部病院小児科研修医として研修を開始後、当直明けの休日や土曜日の午後は、市町村の乳児健診が組みこまれていました。健診の意義も十分理解しないまま当直明け後に健診会場へ駆けつけ、終わると病棟に戻り業務を行う充実した？週末の日々でした。

健診で母親からの質問にうまく答えることができず、離乳食の相談を受けた後，市販のベビーフードを購入して実際に食べてみたり、発達の相談など落合靖男先生に相談すると，「バカ、こんなことも知らんのか」と笑いながら丁寧に教えていただきました。今でもそうですが私にとって健診は楽しく、保護者や子ども達から小児科の楽しさを教えてもらいました。小児科や周産期診療を続けているうちに、若年妊婦への対応や事故予防、虐待対応、外来での保護者の不安へ対応しているうちに子育て支援など小児保健の重要性に気づきました。

2007（平成19）年から小児保健協会理事、2013（平成25）年より学術編集担当常任理事として機関誌である「沖縄の小児保健」の編集に関わっています。同誌は、沖縄小児保健学会で口演発表した報告を論文として掲載しています。小児保健協会は50周年を迎え機関誌も50号発刊しました。さらに沖縄の小児保健レベルの向上に貢献できるように投稿規定を改定し、投稿論文の査読制度を明文化しました。「沖縄の小児保健」の論文が全国で評価されることを目指しています。

## 小児保健協会50周年記念に寄せて

沖縄県小児保健協会 理事　島袋 富美子
（沖縄県看護協会 保健師）

沖縄小児保健協会設立50周年おめでとうございます。

1973（昭和48）年、本土復帰の翌年、沖縄の小児保健の向上を目指して、小児科の先生方が発起人となり、当時の母子保健行政担当者と一致協力して、沖縄小児保健協会が設立されたと伺っております。

貴会は、小児科医、産婦人科医、保健師、助産師、看護師、栄養士、臨床検査技師、養護教諭、保育士、母子保健推進員等小児保健に関わる多職種が会員として、活動に参加し、沖縄県の小児保健の向上に多大な貢献をされていらっしゃいます。小規模離島を含む全県下で、乳幼児の健康診査、健診結果の情報処理及び市町村、関係機関への還元、小児保健関係者の質向上を目指した研修事業等設立から半世紀、脈々と活動が引き継がれています。

1982（昭和57）年、私が新任保健師として石垣島に赴任した頃「乳幼児一斉健診」として、日本の小児保健のトップにおられた平山先生、日暮先生等と小児保健協会の先生方がチームを組んで、夏の一大イベントとして乳幼児の健診が行われていました。

現在では、小児保健協会の活動により、県内どこに住んでいても適切な時期に健診が受けられ、子どもの育ちを支援できる環境が整ってきました。沖縄の未来を担う全ての子どもの幸せのために、今後も、ますますご活躍されることを祈念いたします。

## 未来のこどもたちのために

沖縄県小児保健協会 理事 知名 博樹
（沖縄県薬剤師会 薬剤師）

このたびは小児保健協会創立50周年、まことにおめでとうございます。幸運にもこの50周年という節目で理事に就任し今後さらなる発展と飛躍に寄与できることを大変喜ばしく思います。

私にとってはこの「50」はスタートの年であり、理事に就任した直後は小児保健協会が掲げる事業計画や主な活動の中で薬剤師としてどのように関わりその知識を寄与できるだろうかと模索していました。この沖縄県小児保健協会は本当に様々な職種の方が関わり、乳幼児健康審査などを通じて小さな子供達が健やかに成長できるよう支援し沖縄の子育てをずっと支えてきた団体です。その中で「薬剤師としてできること」それは調剤を通して小児に安全に医薬品を提供する、授乳中の母親に対して必要な情報提供を行う、また学校薬剤師としてこども園、幼稚園などで過ごす子供達のための環境整備など、様々な薬事衛生を担い小児保健協会を共に発展させていく事です。

小児保健協会には他にも小児保健医療に携わる従事者の資質向上、子育て支援、感染症、歯の健康に関する事などの普及啓発活動なども主な役割として担っています。このような多岐性の中で互いに様々なスキルや知識を共有し、これからも小児保健従事者の一員として未来を担うこども達の成長を見守り続けたいと思います。

## 50周年を迎えて

沖縄県小児保健協会 理事 照屋 明美
（保健師）

県の母子保健班に在籍している時、2013（平成25）年4月から育成医療が県から市町村に移譲される事になっていました。その時の問題は、育成医療に該当するかの審査会を広域でできないかと市町村から要望があり、どの団体が受けてくださるのか情報収集している時に小児保健協会が「子どもたちのためになるのであれば」と玉那覇会長他理事の先生方が受けて下さいました。

その後、私は、退職後事務局に保健師として勤務しながら乳幼児健診の体制づくり、疾病スクリーニングの精度管理部会の立ち上げ、育成医療審査会の運営、母子包括支援センター立ち上げ等に関わってきました。事業を実施するときには「子ども達の為になるのか」を事務局内において話し合いながら業務をすすめてまいりました。

小児保健協会設立当時「子のどもたちの健康を考え、子ども達の立場に立って彼らの代弁者として活動する」稲福盛輝先生が10周年記念誌に執筆されています。

50年の歳月が流れても変わらぬもの「沖縄のこどもたちの為になにができるのか」を問いながら、今後も小児保健協会が発展することを願っています。

## 「こどもまんなか社会」へ向かって

沖縄県小児保健協会 理事 仲本 千佳子
（名護療育医療センター 小児科医師）

まだ我が子が幼かった頃、公園で遊ぶこどもの傍らに座っていた時に、散歩に来ていたご高齢の女性から「いいわねえ。今はこどもとのんびり遊ぶ時間がとれるからね。うんと可愛がりなさいよ」と声をかけられました。私の祖母は戦時中こどもを２人亡くしています。沖縄では珍しい体験ではありません。

戦後の混乱冷めやらぬ中、右肩上がりの経済復興を遂げた日本はこどもがそこかしこに溢れるベビーブームで、活気あふれる社会を経験してきました。それから80年近く経った今、少子化が進み路上や空き地から群れて遊ぶこどもの声が少なくなり、こどもの生活に大人の関わりが随分増えたと感じます。こどもにより丁寧に接する事が求められ、大人が介在した習い事やレジャーも多く、配慮が必要なこどもたちへの支援も広がってきたかと思います。一方貧困、虐待など課題は未だ多く、昔ながらのコミュニティに頼らず、情報が溢れる社会の中での子育てという状況に社会システムが適応しきれていない面がある様に感じます。

祖母の時代、母の時代、私自身の子育ての時代、そしてこども達の時代へ。便利に情報で繋がる事が出来るけれど、「孤独・孤立」が国会で取り上げられる社会の中で、こどもが自らの力を信じ「繋がる」事が出来る、安心感と幸福感の溢れた社会になるよう願っています。

## 「こっぽKoPHO」とこれからの50年

沖縄県小児保健協会 理事 浜端 宏英
（アワセ第一医院 小児科医師）

私は本協会の理事として2007（平成19）年から現在まで、2011（平成23）年から2023（令和5）年まで常任理事を務めてきました。協会が東町にあった時代に編集委員やはしかゼロプロジェクト委員として関わっていました。その当時会議室の確保に大変苦労されていました。2008（平成20）年に現在の小児保健センターが完成し35周年記念式典が昨日のことのように思い出されます。今回、35周年時からの宿題であった小児保健センターの名称が「こっぽKoPHO」に決定したことを大変うれしく存じます。私の後任として常任理事となった仲本千佳子先生が大変素敵な名称を考えてくれました。

「こっぽKoPHO」の完成以後、協会は充実した仕事を着実に行ってきました。乳幼児健診データを解析した「特別研究事業」、「子どもの生活習慣対策委員会」、「親子で歯っぴ～プロジェクト」などがあります。協会は県の小児保健分野において、多職種を連携させる重要な存在となっています。しかし、これからの50年は少子化が待ち受けています。幸い昨年「こども家庭庁」が発足し、国も少子化対策を確実に行っていく必要があります。これからの50年、協会はメイン事業である乳幼児健診を進化させながら、少子化に歯止めをかけるさらなる連携や協力が小児保健協会に期待されてくると考えています。

## 集団健診の素晴らしさ

沖縄県小児保健協会 理事 比嘉 猛
（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児科医師）

沖縄県小児保健協会ができてから、50年経つのですね。協会が手がけている数々の事業の、こどもたちや社会への貢献度は多大なものだと思います。今後もますますの発展を願っています。

理事としてはあまり貢献できていませんが、協会の事業の一つ、集団で行う乳児健診で診察を行う医師として関わらせていただく機会が年に何回かあります。健診会場を訪れる度にいつも感じるのは、活気です。

赤ちゃんの泣き声だけではなく、赤ちゃんの健康チェックのために集まった保健師さん、歯科医師さん、検査技師さん、看護師さん、栄養士さん達が、赤ちゃんを悩みながら育ている親御さんたちのお話を聞いたり、生活環境の相談に乗ったりなど、より良い子育てになるよう皆で応援しているという雰囲気が、とても良い感じで活気のある場を作っていると感じています。離島や僻地もしっかりカバーしているのも素晴らしいと思います。

集団健診が個別健診と比較してのメリットとして、赤ちゃんや親御さんが多くの人の目に触れること、データを一元化できること、などが挙げられますよね。同じ医師、同じ医療者からだけでは見えないものが、複数の異なる視点からだと見えることも多々あるのではないかと思います。今後も充実した乳児や学童の集団健診が続いていくことを願っています。

## 子ども達の輝く未来のために

沖縄県小児保健協会 理事 比嘉 千賀子
（沖縄県八重山保健所 歯科医師）

沖縄県小児保健協会（以下「協会」）創立35周年頃から理事として理事会や乳幼児健康診査委員会等の活動に参加する機会が増えました。草創期からの先輩理事とご一緒する中で沖縄の子ども達の健康を守ることへの熱い思いに感動しました。

平成26年度に発足した子どもの生活習慣対策委員会（５小委員会）での活動や特別研究委員会での乳幼児健康診査データ分析を契機とした県からの受託事業である幼児むし歯予防対策事業「親子で歯っぴ～プロジェクト」（平成28年度～令和２年度）では歯科医師の理事として事務局の力を借りつつ取り組むことができました。

協会の活動は、県職員として従事する地域保健行政と関連する内容も多く、大変有意義な時間であり、内容も濃かったと感じています。さらに、子どもの保健・医療・福祉に関わる多くの職種の方々が参加していることから、子どもを多面的な視点で捉えることができる様になりました。

先輩方から託された沖縄の子ども達の健やかな育ちへの熱意と活動を次の世代に繋いでいけるよう後輩の育成に今後一層力を入れていきたいと思います。

## これまでの50年これからの50年

沖縄県小児保健協会 理事 冨名腰 義裕
（にぬふぁ保育園 小児科医師）

50年前はちょうど10歳、小学4年生であった。ただただ動き回って遊んでいた。いろいろなことをしていたのだろうが、詳細は覚えていない。はっきりしているのは運動神経はよくて（自画自賛）、手先は不器用であったのでかけっこ的な遊び（鬼ごっこ、陣とり、宝とり等）が得意で、制作遊び（釣り竿を作って釣り、凧を作って凧あげ、竹馬作り等）は苦手であった。

現代は大人も子どももとにかく忙しい。コスパやタイパ等すぐにパフォーマンス＝成果を求める。こどもに必要不可欠な「遊び」の場や時間は奪われ、「群れる」ことも難しく、生の体験・経験をする機会が激減している。

しかし、昔と同じとは言えなくても「伝承遊び」は今も生きている。わらべうた・昔語り・ごっこ遊びである。特別な道具や設備は要らずお金もかからない。空間と時間があれば群れることができる。

それを可能にするのは保育園だと考える。そこには0歳の赤ちゃんから6歳のお兄ちゃんお姉ちゃんまで揃っている。私が勤める園ではそこここでわらべうたが聞こえ、昔語り（素語り）に静かに聞き入る子どもたちの姿が見られる。50年後にはそれがフツーの姿になっていることを期待している。

当然ながらその時私はこの世にいないので子や孫に託すことになるが、群れて遊ぶこどもたちの姿をにこにこしながら見ていることであろう。

## こどもが輝く沖縄であるために

沖縄県小児保健協会 理事 前里 万里子
（那覇市健康部那覇市保健所地域保健課 保健師）

このたびは、沖縄県小児保健協会創立50周年を、心からお祝い申し上げます。

2000（平成12）年の「児童虐待防止法」では、虐待の早期発見及び予防等に努めること、2004（平成16）年の「発達障害者支援法」では、発達障がいの早期発見、発達支援及び家族支援等を行うこと、2017（平成29）年の「母子保健法」改正では、母子健康包括支援センター（子育て世代包括支援センター）の設置をすることとなっております。小児保健協会は、国の動向に準じて、研修による専門職への支援、「乳幼児健診マニュアル」の発行、母子健康包括支援センター立ち上げ及び設置に際して沖縄県と一緒に後方支援をしていただき大変助かりました。

ライフスタイルや社会情勢もめまぐるしく変化しており、沖縄県においては、貧困世帯の増加、共働き世帯の増加、転勤族も多いことより、子育てに不安を抱える親子も増加しています。「こどもまんなか社会」の実現に向け、「こども家庭庁」が令和5年4月1日に設置され、各市町村はこども家庭センターの設置が努力義務となっております。これからの50年！市町村の立場として、小児保健協会理事の立場として、思いはひとつ！親子の未来が笑顔であり続け、こどもが輝く沖縄であるために、関係機関の皆さまと連携しながら、県民の皆様の声に寄り添いながら、引き続き発展していきましょう。

## 新しい乳幼児健診を目指して

沖縄県小児保健協会 理事 真喜屋 智子
（沖縄県立中部病院 小児科医師）

沖縄県小児保健協会が創立50周年を迎えました。私は新米理事で、恥ずかしながら小児保健協会の歴史を知らなかったのですが、50周年記念の中でこれまでの協会の活動を振り返ることができました。復帰前後の混乱の中、疾患予防や公衆衛生活動から始まったことや、医師不足の中でも「誰一人取り残さない」という高い志で、離島を含めた乳幼児健診を構築してきた先人たちのご苦労などを知り、尊敬の念を抱きました。

現在、私は乳幼児健診委員として新しい時代の乳幼児健診作りを目指しています。近年、特に沖縄では若年妊娠や貧困が問題になっています。このような家庭はこども虐待のリスクも高く、地域との関わりが重要です。かつて、疾病の早期発見が主目的だった健診は、育児支援や虐待予防など、こどもとその家族に対する包括的なサポートへと変化しています。また、スマホ世代のお母さん方にとってデジタル技術を活用した育児情報や相談体制はより効果的な支援を可能にするでしょう。国が掲げる乳幼児健診のICT化、DX化も避けては通れない課題です。加えて、新たに1ヶ月健診や5歳健診も推奨されています。これまで以上に沖縄県小児保健協会が地域社会において果たすべき役割が広がっていると感じています。これからもこどもたちが健やかな環境で育つように引き続きご支援とご協力をお願いいたします。

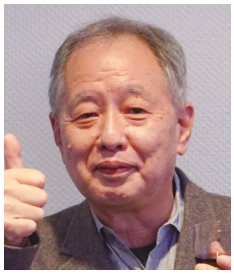
## 私と沖縄 ～健診から絆を深めて～

沖縄県小児保健協会 理事 道田 睦美
（琉球大学病院精神科神経科 公認心理師）

私が乳幼児発達臨床に携わって、40年近い月日が経ちます。その出発点は、都内の保健所の乳幼児健診。卒論研究時に上田禮子先生にご紹介頂いたご縁で、その後、発達の診かたやスクリーニング等多くの学びを得ました。平山宗宏先生がおられた母子保健学教室の研究生として過ごした時期もあり、こどもの発達と地域性の検証等で、宮古・八重山地方のデータに数多く触れました。発達の普遍性と多様性を常に考えるという観点は、この時から始まり、今も沖縄のこども達の育ちの姿から常にインスパイアされ続けています。

さて、1997（平成9）年に沖縄県民となり初めて携わったのが久米島の健診。日暮先生、恒次先生に同行し、多職種健診の原点はこれだったのかと感銘を受けました。その後、県内でもこうしたチーム体制を取るべく、心理士の有志の勉強会を立ち上げ、仲間を増やしてはきましたが、未だ、十分な数ではありません。近年、育児不安や虐待予防の観点も加わり、健診ニーズは身体のみならず心の健康へと広がってきています。沖縄県公認心理師協会とも連携し、全ての健診に心理師も参加出来ればと願っています。こども達が、キラキラした個性を発揮して育つよう、親子の関係発達の第一歩から丁寧に見守る沖縄らしい新しい健診を、皆様と目指して参りましょう！

# 今日まで、そして明日からのこどもたちへ



沖縄県小児保健協会　（元）理事　屋良 朝雄
（元・那覇市立病院 小児科医師）

1993（平成5）年までの11年間、理事として協会運営に関わらせていただいた。本協会の活動を通して、子どもたちの健やかな成長のためには、医療だけでなく保健、教育、福祉に関連する多職種の協力が必要であり、多くのみなさんが懸命にサポートしているという姿を肌で感じることができた。

これまでの50年は母子保健、児童福祉事業、予防医学などに重点が置かれた事業活動が主であり、これからの50年は、保健・医療・教育・福祉を時間的空間的に一層統合していくことだろうか。疾病への対応以外に発達や行動障害へ対応が重視されてきている。そして急激に進んでいく少子化、いびつな人口構造。異次元の少子化対策、こども家庭庁設置等の政策はどのように展開されていくだろうか。

とはいえ、時代に関係なくこどもたちの笑い声、泣き声は、私たち成人が絶対に勝てない社会の活気、エネルギー源である。こどもは、地域、社会そして日本の未来そして希望である。こどもたちの心身の成長のために、もっと多くのヒト、モノ、カネを注ぎ込んで欲しいと願う。本協会を含め、こどもを取り巻く機関は、行政に対しても声高々に発言していく必要があるかもしれない。

「こっぽKoPHO」、ほんわかとした可愛い愛称の沖縄小児保健センターそして保健協会活動を今後も興味深く見守っていきたいと思う。